



五拾番  
三冊

天保

遠13  
1860



門へ遠18  
號 1860  
1-3

三畏行者著  
一梅道人画



印

三畏行者

市川 團十郎と昔より大江戸  
名物 活一 八代連綿の家  
能懐の巨礫あり。項目三井 旗  
中ふ 逆上せしむる 愚の風説  
まら ねれど 信法ししも 忠告は  
かゝ事 ちかぬ ちかぬ ちかぬ

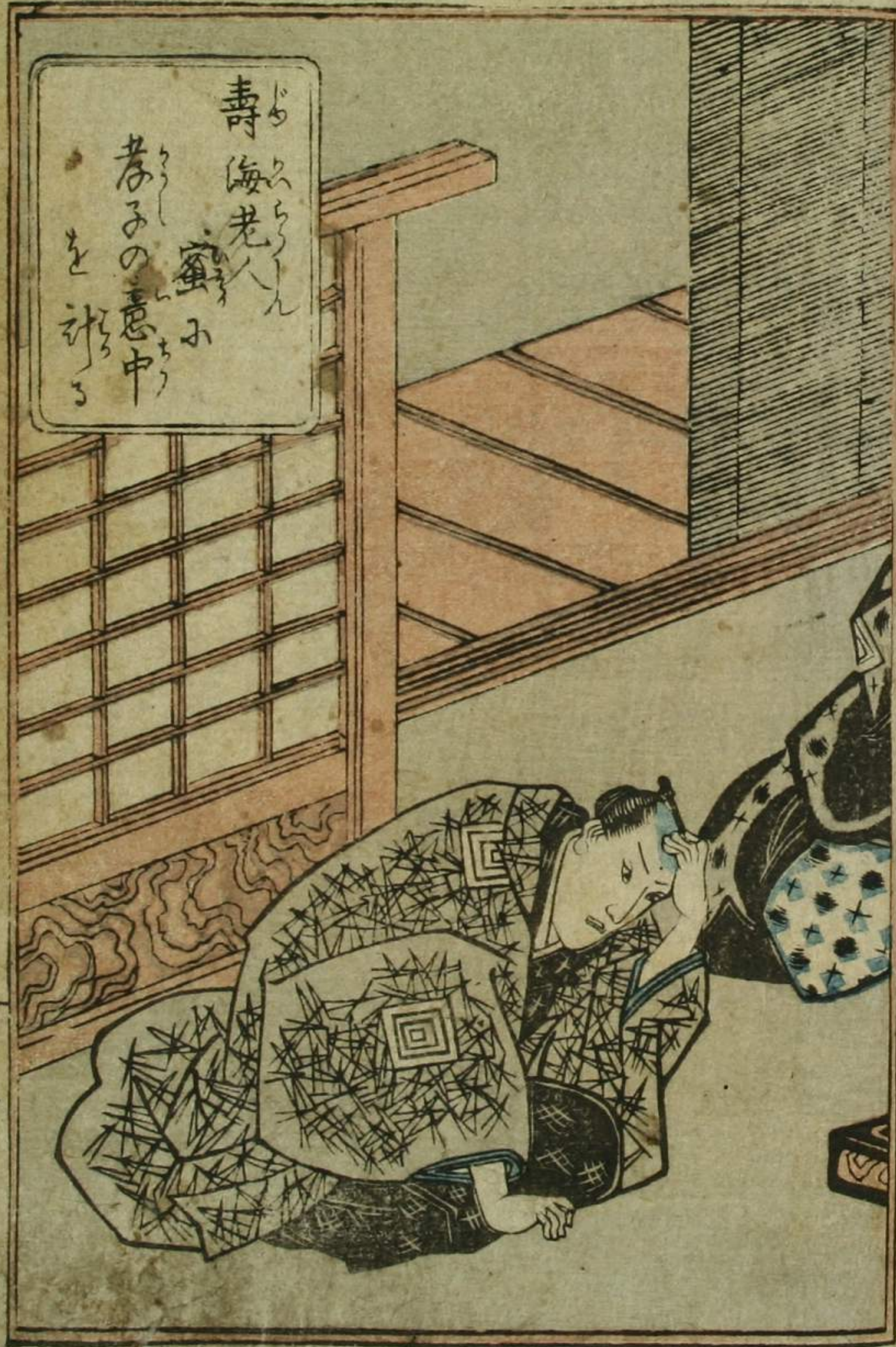
義の固く命を輕しとすは勇  
 士は常しと曰ふは念はるる不勤多に  
 新物を一通力を以て懐華の事ト  
 實をを搜ゆて選り好事の  
 君子彼を具負法連衆小若ん  
 一彫刻或急と云は是也

亦之舟一を具負法余の舟  
 狂氣の舟一を具負法余の舟  
 と云倉卒小華を練

甲寅秋日

三畏行者題



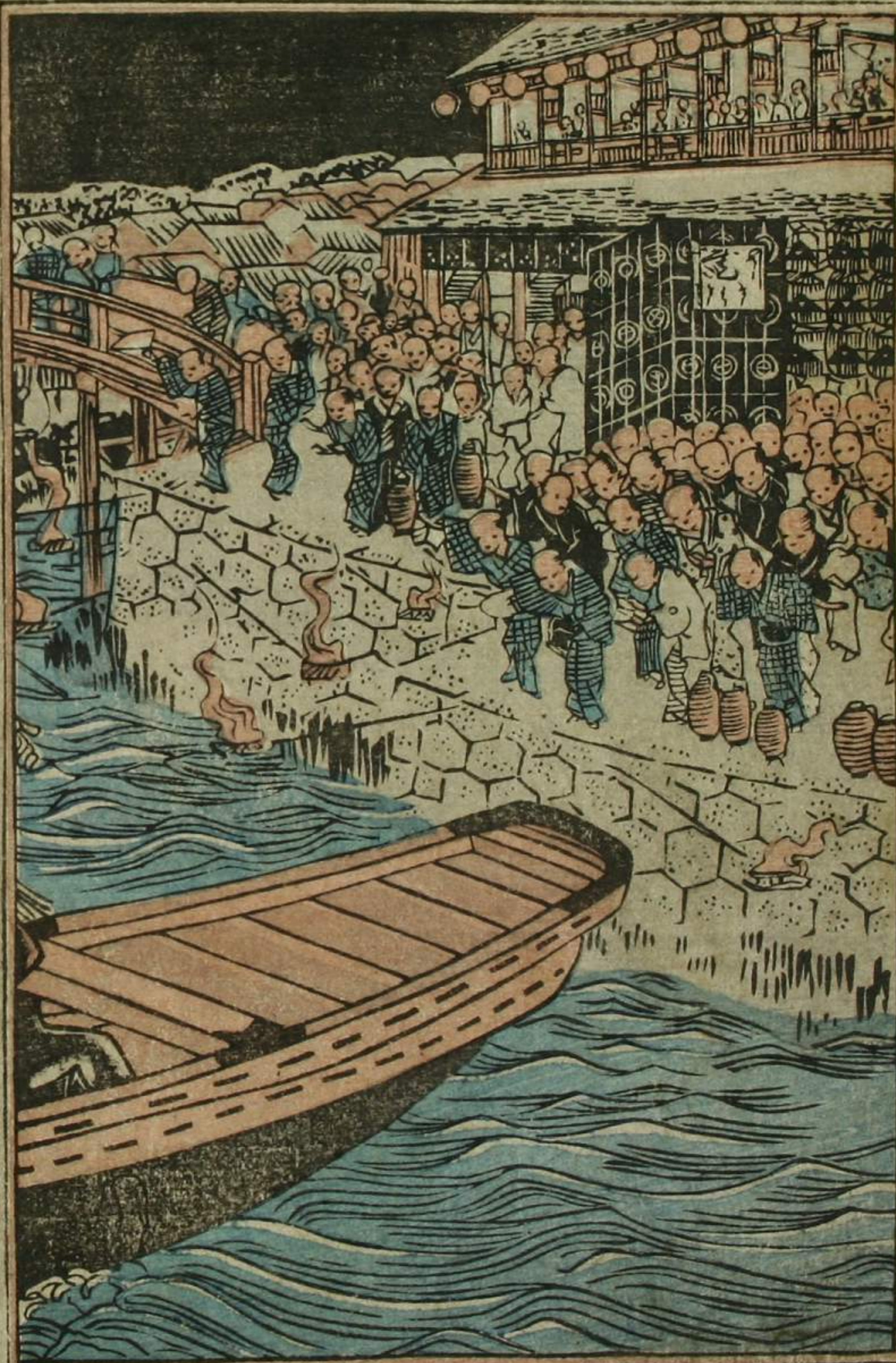


壽海老人  
孝子の意中  
を計る





新白猿益船  
舟に  
道頓堀  
舟に





おのち  
 花月  
 舟  
 舟  
 舟

露時雨八代愁抄上の巻

鳥有山人三界行者編

珠説発端

時今嘉永七甲寅年秋八月六日の夜深更不  
 及び極樂浄土の東門を打く者あり白書  
 俱生神目成す何者なるぞと尋ふに  
 成回ふ不動明王身内の者何年金伽羅  
 伽二童子の内一人の身下さるやうと述より

時不初明王の通方ありて八代同國十中ありの事と  
あひ海のゆゑ有て猶ほ所へあり奉り不審と  
續上とのと引寄ぬる忽ち四勝えあぞ座と  
るるふ勿体なりゆゑと悲しくえんハ怒り二童  
子さぬハ何れぞと辺城えりふ金伽羅制多伽の  
二童子ハ遙きうて平伏してありて明王ハ  
さくハ朝不及びと包と隠とも逢荷の事  
あり早く其状を中座と有るふと升ハ怒り

不汗を流しわらうさぬふハ時ハ父の罪成あり  
不似され共美ハ兄りさる座一私ハ四利義成蒙  
思先祖の蔭父の蔭え未熟なる義公を思  
はるるをされて後者の教にかり家声を流さ  
お勤邦するも金くハ八卑の四具負教と新  
の着勤おもせ一不金ト升と心魂不儼  
が死仕合不給ト有り升慈多知為年市村燈六中村  
五十中住居邦て充切の者不給ハ親方方子松方

の儀お彩紙并に万端居果いしし教具并  
松おとり并れば柳の枝小横ぞの平をゆ収帯  
空間小深右の収お流とあみ月狂言不忠信由言  
のし初収お勤まゆるやう去津具負福分は  
はる果由大収の美真名辞退やうども再三の  
出すしめりごうごうお勤并にお符留十部とるを  
収勤られ并るやうやう久くは留十部やうまのあ  
娘小治と誰おいさせやう中とお尋りゆ人  
身

後系小勤ませや度教中さるやうおとせし  
留十部次の外不形知しし小渡の収おむてむづ  
りし本の生娘ゆ十部ゆあめの収者加収あて勤  
させぬ収にゆくは儀の小結娘形るるをいし  
かうし其冊状おるるとるせ収を納められん  
形おさせらるるはとるせ収を納められん  
あけ外産く儀おきし一五折や収おし合  
始形るるれば二股あせあづりて重なるの



世界を一幕差か七日月切ら二幕月  
引ひかせりるりちりあぞ不動の五めがり成り  
あひいやく 其相言の事成同あはびの外  
其方が結行の記をわする身 金伽羅制多  
伽ふ中 附結中 万事 守護いさせし中 附結  
らふ志らも六日の金伽羅のあ書るふいふ急り  
とくわるあふ及びいぞと二聖子のちを白眼  
あふ不量伽羅言る子忘入る今文中は六中 結の相

ふはたあると極の色力でもいぬるさるぬ秘密の  
記がらあや人間通用の理窟とく遠ひ理非のさる  
混雜いこ 居ぬ白あおあけあさく私を由草紙  
戸出さより 附添居れさくあく初くあ初め  
外らる変あうほし中あぐれば内中よりさあしめせ  
と云んとさる成の外と量伽羅が杖を打てあさる  
不制多伽ふ不押隔其方がはより漏るる様あり  
量伽羅あはせくああれといめを幸ひ夏休の

あつぱしうまてやあつて 一ぱいの年  
間尾良右右左衛門の芝居日教日お終つては本場  
暑をさけ居る所を 密に諜用をこしは波地へ  
振まかひし 狂言をまきうれあふ年か夏の尾上梅  
幸跡うし出さの納束しやせられどもあまに尾上  
菊江年仍合せ梅幸ふ鼻あうせ早速 初日お有り  
うらふ江戸あけ大入せ ちと命の波評判よく  
又一替りしと進められ忠臣蔵 小由良之助 純平の二  
波は時ハ大坂の巻を極又といふ者 祝梅先 為より内

つあり ことぶき せんゆ  
延ありてあふ方の令ととりておされは換あふ  
うらむひた 浪死とも多ひ ねんと 深く けりし 白  
浪お臨り 名右左衛門を又く 大坂へ けりし あり 割多 けり  
童子評しと云  
大坂へ 二お城 朝一夕の事 けりし けりし  
久しお者もえ鳥若といふ者の けりし けりし  
けりし けりし 男あて鳥若も けりし けりし  
通をしと有るが不良の けりし けりし

のちとまきうた 後拙久時城ゆき 白樫の金主しと大不利成  
ゆきよりあひきく 白樫ふ中あひあつしゆあて  
一とくバニもともるい日の出の大き者私か良あて  
三ヶ年もの勤あつバ一経融を以て 四父子た不備  
財を去し 四角上向に備あてお後し 中産し  
篤と心お積あつて 今あ二年の内より六にお成ご  
く一年くあつて時へ戻ると先へ延れば隠居あも心先  
年の事也 江戸の親方も二十五六まで内は常々

有令のみ百六のありあておけバかむもああり  
四壽命もあせん 延るた理之承らく 四若芳あさ  
れと心あられバ老成中事が肝要ありあふ  
の孝行の巻ふと紙城つけさる長生しそふ依  
おも安んうせき 孝書紙文うが人間充後の樂  
此とあるあつるばとあつての良見ある故に  
状道あふ其由城の中あると雖文通しそと  
具ふにやいふやあつるがうくは及父子此

とえ どうちまはせ とん  
対面 しんの中 しん一 しんあり申候中 しん一統 しんあるれど しん白 しん穰 しんが  
子 しんでも しんそ しんあれ しん物 しん毎 しん大 しん事 しん成 しんたり しん迂 しん活 しん不 しん世 しんね  
生 しんれる しんれ しんバ しんお しんも しんを しん親 しんひ しん居 しんり しん一 しんふ しん物 しんを しん夜 しん終 しん中  
お しん又 しん子 しんの しんも しんり しん代 しん孝 しんひ しん心 しんの しん備 しん財 しんの しん吐 しんり  
穰 しん若 しん所 しん不 しん移 しんり しんて しんう しんく しん後 しん改 しん一 しん年 しん限 しんり しん不 しん二 しん産  
穰 しん昔 しんの しん事 しん故 しん何 しんれ しんの しん産 しんも しん自 しんれ しん物 しん成 しん生  
合 しん會 しんり しん不 しん波 しんを しんせ しんい しん見 しんを しんい しんせ しんと しん我 しん勝 しんと しん世 しんの しん智  
ひと しんり しん其 しん産 しんの しん役 しん役 しん者 しんを しん見 しんら しんじ しんて しん心 しんも

る しん役 しんを しん勤 しんひ しんる しんて しん給 しん分 しんの しん事 しん役 しん是 しんと しん心 しん配 しんも  
惟 しん独 しんれ しんの しん者 しんも しんり しん年 しんも しん不 しん若 しん勞 しん少 しんて しん皆 しんえ しん波  
一 しんと しん而 しん素 しん人 しんが しん多 しんく しん役 しん者 しん道 しんの しん復 しんり しん也 しんと しん奴  
も しんり しん一 しん年 しん中 しん胸 しんを しんさ しんし しんり しんて しん居 しん也 しん其 しん世 しんい しんつ しん多  
病 しんと しんり しん私 しんを しん承 しんく しん役 しん者 しんの しん出 しん來 しんま しんい しんつ しんと しん父 しん子 しんは  
む しんの しんの しんの しん上 しんが しんり しん白 しん穰 しん點 しん既 しんも しんつ しん不 しん入 しんを しんち しんが  
う しんら しんう しんた しん生 しん質 しん也 しんあ しんり しんを しん受 しんへ しん也 しんた しんり しんの しんぬ しんり  
と しん不 しんま しんし しんの しん積 しん年 しん來 しん孝 しん行 しんて しん心 しんを しん靡 しんを



ありては 沙苑を 出でて 右郷へ 花と 立寄り 有る  
まひと なる 名深の 比お なる 二番 中を 八幡 宮  
あされども ことわり ありて さの ともく 先ぬれ び  
馬小 劣る こと 後の 幸と 比 厄物 小 突出 され 内と  
又 浪花へ 入り 咲と 出 けり こと 考へ ても 浪花 比  
あが あり ぬ こと あり けり こと 大坂へ 入り けり こと あり  
され ば 心 あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり

歩り 浪苑の 土小 敷き び せり あり ども 境 あり けり こと あり  
ゆり あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり  
且 好 あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり  
出入 あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり  
初 あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり  
ま あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり  
そ あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり  
や あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり けり こと あり

さる者もはし 膝太 終合とら 後の事とら 借る  
金事に 二井ハ父の 烟をとりと 夢ソリヤ ちるこ  
権のり 魁も 角も 梅ハ 井ハ せのり ちるこ 借る  
一ゆり ちるこ 早速ハ 烟直志 ちるこ ちるこ 借る  
振る 寛ちるこ ちるこ 今とら 今とら 今とら 借る  
ト ちるこ ちるこ 二井と 余の 事故 ちるこ  
果ちるこ 言葉も ちるこ 其時 海老 花 面 紙  
中ちるこ げか ちるこ ちるこ ちるこ ちるこ 引 ちるこ ちるこ

今般 極久の 忍 忍ハ 従ハ 承く ちるこ ちるこ 借る  
廿四ガ 写大坂の 舞臺を 勤め 父を 具 具 借る  
紙をの 口と ちるこ ちるこ ちるこ ちるこ 借る  
世 世 借る 借る 借る 借る 借る  
義利合ガ 有 中と ちるこ 権のり ちるこ 借る  
一 ちるこ ちるこ ちるこ ちるこ 借る  
一 ちるこ ちるこ ちるこ ちるこ 借る  
一 ちるこ ちるこ ちるこ ちるこ 借る

ろ我は上ふ又り不ど備材が之るともさうく  
いとぬ父が身代さげく子おのむとい事  
は付廣い世界アメリカイギリスおもよもある  
すいどうぞ親の頼をすつてけく道頓堀を  
つとめて其や田代志むる不動松波が海人の  
して大坂(新)御座あると松も昔くふおを  
下され父が頼叶へくゆされと井と前後ふか  
くお歎くあぞと井の心のお先期しく

世にあり事もお親のこのと疾おもりどくれは是と  
の約束事と胸を居父とのさかどおとあつ  
るくばいふも四つ後より浪を起しあつるおと井  
海人のしてけりあつと海成改めくおのれが  
後のおふ声あつてお預成然いそとよはる  
お約束の世に金子千女お父子の中へはし出  
しめらるる用けがいのるおるあつる先植久  
も後をつひく白木の墓よへおありのを





おどとさめく四ノ丈ありしが松も伝ふし  
なれを新心も一度とけくやさる成田の  
知さるお福がひ申し行りあるおはしあ  
さうらばもけ地へ四出勤とすて進み全成者  
へうけくあまふふも二かでも都をりせせ  
中されと横車成押さも親方をすでも大坂運  
くはるさ勝負換得とめ運日一本の市川  
園十郎を極久が大坂へ手成度くあま

まよく有りあつとあいのめい新小似あはぬ  
あまひ奴とやと大坂中でのれとりやモワ能と  
換も得もつと事とやまの誰とともあはるの  
園十郎ぢやアはがも福とよの戸のふがまひ  
とさ西友君の爺とあはりよと社作小題目  
新進小経と申すのふ論がゆるさうあやが棟とがに  
うらうのあをわごうあはれど人の清命があらぬ  
あまぬあや隠居が盛りに此はつと月が出て

高きのお方でも出来すひとおのふれどの  
お慕し月花おあじ員人英婦の先くら  
りちうける有物も果お附く栄耀榮華  
をなされしも冠お崗の障が出来て碧附ハ  
た遷の身の上と果鞍松きやうで有とが  
孝行なるみ成持く枯木お花さく時  
色目お及端はなされしも江戸のあ  
我程はもうぬがア修よいろ道とて仕

さうとも技持切菜多くと居るおなまき我  
舟を勤し取全後まら大坂へ行くきりあが  
く来たる故お舟も安樂それおつけても  
三井を喰く毒をのせ江戸の信持の音  
音を助けくありとあつるやうあつ居  
いふなどあつたとお尋やうこのお中りとの  
るゆその位さういと安いと松がなありと  
出出勤あるるは父子大いお上、お信あり

かばい申さんとの口約定四徳居の希で中悪  
ひが没者も何でも着ひ口が花成助歌古夷  
も待たれぬさやどでもさすぐれ歌雀も  
義ふうけさう云ひはるれた寂が法いさ若  
い婦人が悦びぬゆ早く人形を討つ歌雀  
うめづ約し懸されバ市村家橋を唯あそ  
義子たお突せんと思ふ中り金斗をも  
さうひ花物並お土産物まを送りしに病社

為小志をまことさげ歌をもえせたりて人とお  
情がうせ歌雀もおてふして江戸狂言成せんあ  
と約交さる甲斐交もさう力をおとさるふさう才  
も細るく面赤を返迎おひげりく故人の幼  
小入二所々の古史えといひ沢村高賀も市村  
彦不任さう名古屋あて没さるへ定てお死  
周念もあふが年を繰さうさうとさうおれ  
夏で近頃かと松浦の舟子お放て家相方位



えんどう  
三升初  
智子  
の切るるを  
感懐  
を

をかり本が親方おまへハ星が悪ムり市て今  
 年を内ふごころても外より種々みるを携て来  
 て四股の意とが有より肝積ふさがるにが出  
 来とくまをさうとくつと男分ふもかざる禍が  
 およりまらうと旗印あさるうん今まをの事ハ  
 流しとくあぬひけぬを若方して今けぬを生れ  
 と親おあがりあされて大坂へお出るされ悪り  
 をバ祭り更とく若事し是とく私にお任せ

言されて能松おあくと異ろとわれれば極又が  
 身おより更とくみともあいの事といはしませぬ  
 此方の意やうふしんお借付と方端此事  
 どのたりと取身ひまらん四股居ふも四安ん  
 るされませとさも心切おやを故二井ハ心  
 内不安心よふ思ひるう親父も例お居事  
 いちある丈夫の計策も有盛きうと家信様  
 親お任せれどもそれやとあいなさる極久

ガ中付ちゆうぢゆうする料理りやうり追おひく酒宴しゆゑんとする限居りんきよ八月はつげつ  
より下戸げとのふるまれば親方おやぢと一不ひとふお夜合やがひお  
るさう中せ志しし親方おやぢお夜合やがひ酒しゆの山やま上かみを此  
中ちゆう西さい歌かの風かぜの便べんりあうけのりあうけのりあうけ  
でも二三杯さんぱいの室むろううりあうけ酒しゆが酒しゆ人ひとあれ  
バ垂たふお戸と一の平ひらにさる酒しゆと極ごく吟ぎん味みして  
中ちゆう付ぢゆうまこと其外そのほか同付どうぢゆうの者ものあ三輩さんぱいお  
交まじり教しやう杖じやうを傾かたむくるはるるお合あ事じも終しまる

余あまり夜よが交まじりし酒しゆの山やま上かみと極ごく久くら不ふ産さん安あん  
一席せき改かへて茶菓ちか成なりまけ親おやぢ方ぢゆう父子ふし成なり法はふど  
中ちゆう給ぢゆう教しやう今いま宵よも最さい上じやう吉きち日にちあう山やま上かみ坂さかの契けい約やく  
極ごくりさうとへは交まじりし永ながく歩ありがはし疎そ狂きやう  
言ことの日ひ較けいいさぶ八日はつにちあれば酒しゆの山やま上かみ切きあうは地ぢを舞ま  
納おさめ残りのこり七日しちにち成なり大坂おほさかへ取とり入いる女おんな日ひ比ひして其その上かみの  
日ひ也なりも山やま上かみ極ごくあう双ふた方かた比ひ運うんふ際さいじてる冬ふゆ  
中ちゆう也なりも山やま上かみ極ごくあうお續つづき大坂おほさかの人ひと身み成なり引ひきて

駿うま不ふ止とるるははりり今いま青あお是これ々々四よ上かみ坂さかのの先まへ觸ふ見み  
ととくく帳とじをを巻まきき折をりり又また宿しゆくのの朝あさ香かよりより早はやかか成なり  
ああつつくく中ちゆう紙しああのの江え戸と傳でん馬ま所ところののおお客きやく今いま青あお私わたし方かたあ  
おお泊とまりりのの折をりり江え戸とのの親おや方かた名な古ふる屋やああのの邊へり面めん多た敷しき  
ああのの日ひいいせんせん宣のたまへへもも出でののうう成なりずずれれててせせひひたたおおめ  
おおかかををははししととしてしておお逢あひひ不ふ多たりり連つれれ不ふ口くち連つれれ中ちゆうせせととあある  
由よしめめ糸いと此こゝ捲ま打うちをを流ながししてて来きりりししとといいふふ二ふた井い  
穿うてて名なののつつももどどもも竹たけ島しま町まちとといいふふおお心こゝろ満みちちりりああれれどど

いいききせんせんとといいふふおおままささららばば大おほ坂さかへへははりり折をりり折をりり時ときをを  
とと我われののああるる最さい中ちゆうののううそそののううれれ縁えん宿しゆくあありり一ひとり  
くくららいいとといいふふ不ふ限げん居いのの旁そばううちち後ごををああららははるるおおがが若わかいい中ちゆう  
へへおお客きやくをを勤つとめめららもも勤つとめめとといいふふおお逢あひひ不ふ違ちがひひ身みはは友とも一ひと  
てて駕か不ふ案あん移うつれればば何なに程ほど傳でん二ふた里り宿しゆく成なり飛とぶぶををりり  
りりがが二ふた井い駕かのの内うちににおおりりああららははるるおおののおお心こゝろ満みちちりりのの先まへ  
おおややよりより屋や浦うら宿しゆく案あん不ふ折をれれおおのの名なををああららははるる縁えん宿しゆくををりり  
二ふた日ひ中ちゆうああららははるるおおののおお心こゝろ満みちちりりああららははるるおおののおお心こゝろ満みちちりり



ひとよりちよはしと常鏡に死れあひあさる成あひ  
出しそれのきのふやきも細屋の事容へ流ある  
りとし色こおあ同もろく細屋に居くお死に成り成  
ゆふあつらうへの昼の如く踊踊成りし中居お如  
ろまきぐ之の脚のそろひ一柱お若はれて三升がよ  
を取く二階へより大座浦へともろお容とおわ  
き者もえくびどれが如常中う藝者中うさうお  
ころうびえ坂へと西四六十人の男女お揃めて同じ

出立時く之が成愛物のおお座させんとはる成後へ  
思おのまゝる布とあへ申あお時くおをひにこ  
いのをまけげ今思おのまいせんう余おどの同様に  
碎あく若くいう親方があさるうおれがかりお  
い愛物へまのうせえ皆があて答意せいと云はれ  
し故はとおおまゝりまると来ておろておすある  
お三升も珍方ろくアペラの座布圍おはるらり  
ころのふ時お親方をあがあういぢめおバ常れ

此の多がつけれぬと想てうほ成進る小女後の  
 橋へ男が渡りしもかくやとあふれり之名ありあふ堂々  
 する好男子其程佳と人品骨柄せりぬの云まじし  
 婦人のおれもむるりかくほ成うのよる不後れを  
 小ら者へ店寅が北軍よりかけつけ之盃の産真とと  
 次もあり飲もあり三升もあがうく盃成めらえ  
 ば飲ともく吸ともく三升のほまんとめて産成  
 とくばおむけつる中居ども多成成くく盃成不連

由元又元の産へ突らんと其中居も三升ヶ年  
 只成り世親方をゆくかいそのお家へよかど碎て  
 ぶやうなへ連中へあひとよほど成あてのそと人  
 一守りてあけるんせとも成らるあぞゆも夫年  
 あるまひうと三升の減客ぞとらゆ一間の内へ  
 へりーとるり

金伽羅童子彈しと云

今より四年ぬ昔の事なるが江戸山のよみ

絶世の美人と号する娘あり之弟をある  
情の切なり身をおぼれくを銀成多  
お出して其とも果さばしてきひ失ひたり  
其父おがられ者あり教諭もれども文小用  
ひげ遂ふぬれを交く江戸にお存の事  
ゆきさびき鄙ふさぬすひく後此れ  
宿尔流れ来りて受容お思ゆりて  
故名をさぶりのや一嘗て云々女を

若海お移るも八代目成慕ふ故よりせめて  
一及を思ふ妻ありバれお死をとも  
是を蓮なるかりと云くりさるるはも之升  
名古屋の是居く出勤する事成すてゆく  
の屋成ともさんともお容ありて之外成  
皆此の玉屋とておをえく親しくおん  
りり成無トさるよりおまこのおひを世し  
侍馬町の客とらふ名成殺けく身揚し

多くの妓女を集めては、  
 遠ざかるを察し、  
 の方々へも、  
 人々も、  
 そとへけ、  
 れば、  
 おも、  
 るの、  
 漫、

おも、  
 お固、  
 と、

時雨八代愁抄上の巻 終

